

化合物語尾 in と ine の別如何(筆者不明)

薬学雑誌 1891 年度 490 頁(明治 24 年 5 月号)

予一日某学士を訪ふて談^{たま}偶々薬学上に渉る。予問ふて曰く「彼の“アンチピリネ”“モルフィン”の如きは何故に語尾を変更して“アンチピリン”“モルフィネ”と唱ふるや」と。主人笑ひて曰く「これはまた異様の尋問を受くるもの哉。さしたる六ヶ敷き理由はあらず。総て in の語尾は非^{アル}垂爾加魯乙度^{カロイド}に附し、ine の語尾を有するは垂爾加魯乙度の特徴なるが故なり」と。

余曰く「其は英米等に於いては実に貴意の如く然らんかなれども、元来 in、ine の起源は希語の所謂 inos(有力、有効)にして往時の圓(規^き那^な圓^{えん}等)と云ふ場合に適合するものなりと聞く、左れば in も ine も文法上に於いては同一にして薬局方上^か如^か斯^か区^く別^{べつ}を付くるは間違を生ずる基ならずや、已に先頃欧州に於いて右の如く語尾にのみ委せしため、Gelsemin(グルセミウム^ワ華^ニ爾^ス)を Gelsemine(垂爾加魯乙度)と過まりて死を致したる大出来事のありしにあらざや、

先生以って如何となす」と。

主人答へんと欲する如く唇頭動きしが、此時下婢襖開け入り来たりて主人に名刺を示すや、主人忽ち声高く余に向ひ曰く「甚だ失敬なれども至急の用事出来したれば今日は」と。余、意を悟り心中冷笑して去る。

(以上、少し読みやすくしたが、薬誌雑報欄の記事をそっくり書き写した。この記事はシをレに誤記していた。圓は塩の当て字かもしれないが不明)

さらに筆者は別の日、ドイツ薬局方、オランダ薬局方をみて Syrupus が Sirupus に改められているのに気づき、ブルノー・ヒルシュ氏を訪ねる。氏は例の美髯を捻りて曰く「その事なり。余も実に不審に思い居たり。抑も Syrupus なる語は^{ギリシヤ}亜拉比亜の srb に起源す。故に y 或は i の字なし。希臘は之より serapion なる語を造り、中古の^{ラテン}拉丁に初めて syrupus なる語生まれたり。薬名を記するに拉丁語を以つてするものとせば、必然 syrupus を襲用せざるべからず」(一部省略)。

小林 力